

## 第一章 狩猟と採集の時代

### 第一節 先土器時代

#### 二つの時代

アメリカの考古学者 R・J・ブレイドウッドは、まことにおもしろい計算をしてみせた。人類の出現を百万年前とし、この長さを一日にたとえたと、「現代は真夜中であり、イエス・キリストはたった二分五〇秒前に生まれた。最初の歴史はほぼ七分前に始まった。午後一時五三分以前のこと、すべて先史時代のできごとであった」と〔R・J・ブレイドウッド・泉、補一監訳『先史時代の人類』〕。高槻においても、文字によって記録された歴史の前に、文字のない長い先史時代が横たわっている。しかもこの地域で、文字による記録が認められるのは、五世紀であるから、文字があらわれてから、やっと二分たったことになる。最近の研究によると、人類最古の「道具」は東アフリカのオルドワイで、約一九〇万年前の堆積物から発見されるというから、先史時代の長さはさらに倍増することになる。このような長い先史時代のことを知るためには、人間活動の一切の痕跡をさまざまな方法で探検しなければならない。しかし、「長い時の経過」は人間活動の証拠を消し去ってしまったたり、蔽いかくしているため、現在のわれわれが知りうることはまだ僅かである。だ

からこれからのべることも、新しい資料の検出や方法がとられるようになれば改めることになる。

紀元前二〜三世紀に稲作農耕が伝来するまでを、先土器時代と縄文時代の二つの段階にわかす。前者は土器を知らなかった段階であり、後者は縄文式土器を指標とする時代である。こうした区分はわが国の先史時代研究のあゆみと深いかわりがある。そこでこの区分を世界的な枠組みにあてはめるとき、先土器時代を旧石器時代・中石器時代に、縄文時代を新石器時代に対応させている。しかし先土器時代の石器に磨製石器があったり、縄文時代に新石器時代の特色である農耕が認められるかどうかといふことなどを考慮すると、対応関係はそれほど簡単でない。むしろ以下の叙述では土器の有無によって区分する方法をとらうと思う。

**先土器時代** 人類がいかにして食糧を獲得したかという問題は、それが人間の思考や行動と基本的なつながりをもつだけにして、きわめて重要な問題である。この淀川北岸に住んでいた人たちも、長い間狩猟と採集によって生きてきた。先土器時代につくられ、使用された石の道具が、市内の数カ所からみつまっている。当時の人びとは意識的に飼育したり栽培することを知らなかったから、自然環境は彼等の生存にとって重大なかかわりをもっていた。そこで、先土器時代の人びとが活動した舞台——自然の装置について、大略を承知しておこうと思う。

地質学者が洪積世と名づけている時代はおよそ二〇〇万年前にはじまったとされている。その時代はまた氷河時代とも呼ばれ、前後四回の氷期——ギユンツ・ミンデル・リス・ビュルム——と、各氷期にはさまれた間氷期にわかたれる。わが国でも二回の山岳氷河が認められ、それらはリス氷期とビュルム氷期に対応するといわれている。ビュルム氷期の最盛期には、摂氏八度内外も気温がさがったという。最後のビュルム氷期

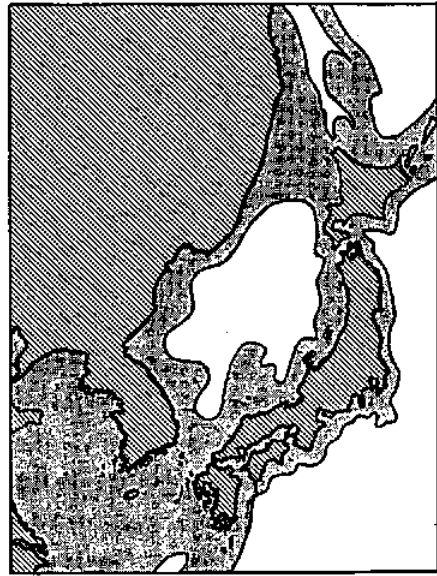


図48 洪積世の日本列島  
(漢・井尻『日本列島』による)

1メートルの海面の昇降は、海岸線に大きな変化をもたらした。大陸棚の海底谷、間氷期の海進による海蝕崖、氷期の海退による海底段丘や河岸段丘などはいずれもかつておこった氷河期の徴証である。ビュルム氷期最盛期には、海面が一四〇メートルも低下する全世界的な海面低下があった。その時期には、日本列島を分断する海峡は認められない。そのため生物の移動が可能であった。北海道は樺太・シベリアと陸続きであり、大陸からのびた半島になっていたから、マンモス象・エゾシカ・エゾオオカミなど北方系の動物が北海道まで達している。しかし、その後海面の上昇運動によって、津軽海峡や対馬海峡ができた。舟を知らなかった人びとにとって、この海峡を越えることは不可能であった。やがて一万二〇〇〇年ぐらい前には、宗谷海峡が

のおわったあと、つまり後氷期からが沖積世であって、今から約一万年以前とされている。ところで地球表面の水分が一定であると仮定すれば、氷河の発達には陸上に水分を固定し、海水面の低下をまねく。このことは汀線の後退する現象となつてあらわれる。逆に氷河の溶解は陸地の浸蝕と海水面上昇をまねく。それはとりもなおさず汀線の前進を意味している。こうした氷河現象の成因についてはまだわかっていない。しかし、±二〇〇メ

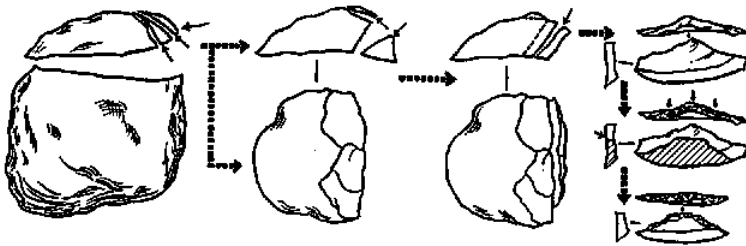


図49 瀬戸内技法による石器の製作

断たれて北方との交流ができなくなった。そして一万年ぐらい前になってや  
つと沖積世の段階をむかえたのである。〔漢正編・井尻正二「日本」  
「列島」第1版・岩波新書〕

先土器文化　そもそもわが国の土器文化に先行する文化段階について、調  
査の手がのびるようになったのは、一九四九（昭和二四）年の

群馬県岩宿遺跡の発見以来のこと、なお研究の日は浅い。それでも今では  
全国で一〇〇〇カ所に近い遺跡が知られるにいたった。その結果、ある研究  
者は前期旧石器時代の存在を説き、その年代も一三万年以前にさかのぼると  
考えている。その概略を示すと、(1)チョッパーと剥片尖頭器文化に特色づけら  
れる前期旧石器の段階、(2)ナイフ形石器文化と細石刃文化を特色とする後期  
旧石器の段階、(3)有舌尖頭器を指標とする晩期旧石器の段階をへて、(4)縄文  
文化の新石器時代へうつったという。しかも前期の段階の地方色はなおあき  
らかでないとしても、つぎのナイフ形石器の段階には、(イ)中部地方東北部か  
ら東北地方にかけて分布する杉久保型ナイフ文化、(ロ)瀬戸内地方を中心とす  
る国府型ナイフ文化、(ハ)関東や東北地方さらに中部地方の一部を含む茂呂型  
ナイフ文化、(ニ)秋田・山形・岩手・青森・北海道に分布する東山型ナイフ文  
化などにその地方色を見出している。それらはいずれも剥片や石刃を基本に  
してつくられた道具であるが、国府型ナイフのみは、その素材にサヌカイト

を利用するところから、横剥ぎの剥片が多いところに特色がある。この横剥ぎの技法について考察した鎌木義昌氏の考察によると、前頁図のようになる〔鎌木義昌「旧石器時代論」岩波講義、  
〔座「日本歴史」原始および古代I〕〕。

この技法は連続的に鋭利な剥片をとり出すところに刃器製作の特色ある技法がみられるのであるが、同氏はこの技法によらない不定形横剥ぎの剥片を利用した横形のナイフ形石器や切出し形石器を岡山県宮田山遺跡で検出し、これを国府型ナイフより後出の石器として宮田山型ナイフ形石器文化とした。

高槻の遺跡 先土器時代の石器は、塚原・土室新池・郡家本町・同新町・川西町・津之江・真上慈願寺山と大阪層群・古曾部伊勢寺裏山・日吉台などからみつかつている。高槻やその近傍で検出される先土器

時代の石器は、サヌカイトと呼ばれる火山岩を利用したものが多い。長年月の間に、黒いサヌカイトは風化して、表面が白くなっている。このほかチャートや硬玉製のものが少数ある。これらは赤褐色の大阪層群やそれを切り込んで堆積した礫層の上でよくみかける。

大阪層群の露頭は大阪平野の周辺にある海拔一〇〇〜一五〇メートルの丘陵地でみることができる。その絶対年代は二五〇万年から四〇〇万年以前といわれている。塚原や南平台・郡家一帯・日吉台などの丘陵地はこの大阪層群に属している。高槻周辺の大阪層群の内容が明らかになったのは戦後のことであるが、それはかつて上ノ口一帯から南平台・日吉台の二方向に土砂が流下堆積したものであったという。

一方、大阪層群堆積後、近畿一帯には六甲変動と呼ばれる地殻変動がある。盆地の沈降や山地の上昇と、それに併行した氷河期の海水面低下や温暖期の海面上昇は、後背地の堆積と密接な関連をもち、砂泥の互層と礫の堆積をつくり出し、上部・中部・下部の段丘礫層を生んだとみられる。市立第二中学校に近い海拔六

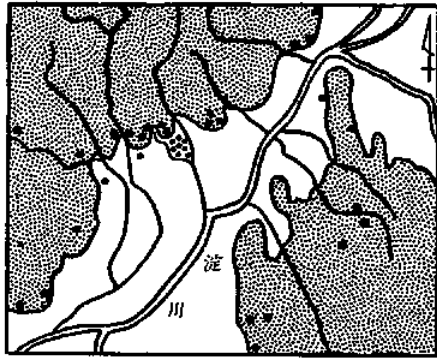


図50 高槻市とその周辺の先土器時代の遺跡

のである」と。

南平台や日吉台より低い平野部は、もつと新しい沖積層である。大阪平野に厚く堆積した沖積層の厚さは深いところでは一〇〇メートル以上もあるといわれている。われわれがみいだす石器群は、大阪層群や礫層の上面を蔽うた黄色土層中に限られているけれども、同じ仲間の石器はこれらの層の上でみつかかりやすいだけであって、そうした場所以外にも埋没しているであろう。

石器の材料 高槻の先土器時代の石器はほとんどサヌカイトの礫を用いてつくられている。その石材は当と供給地 地にはない。ここから南へ約四〇キロメートルもはなれた二上山の近く、春日山一帯に産す

〇メートルの富田礫層と呼ばれる礫層もこうしてできた。この礫層の年代については、同層で採取した植物化石の $C_{14}$ 年代の測定によって、二万六〇〇〇年±八〇〇年B.P.の年代が与えられている。約二万年前の大阪平野について、梶山彦太郎・市原実阿氏はつぎのようにのべている。「古淀川は古大和川・古猪名川・古武庫川の川水を集めて、大阪湾地域を西南に流れ、大阪湾の中央部の現海面下約七〇メートル深のところで古明石川をあわせ、田良瀬戸・紀伊水道を通り、太平洋にそそいでいた。この古水系は古大阪川とよばれている。もちろん、当時は大阪湾をはじめ瀬戸内一帯さらに紀伊水道も陸であって、海面は現在より一〇〇メートル以上も低かった

## 1 考古学からみた原始・古代の高槻



図51 大阪府を中心とした先土器時代の遺跡

る。最近二上山一帯の石器製作地が調査され、おびただしい石器の剥片や原石が検出された。

一体、当時の人びとが、なぜ遠い二上山あたりの石材を利用したのであろうか。よく似た現象は中部瀬戸内にもみられる。その地方では香川県の城山や国分台のサヌカイトが採取され、遠くへ運ばれている。こうしてみると、石材入手の具体的方法はわからないけれど、一定の石材産地をめぐって、各地に散在する小集団が密接に結びつけられていたにちがいない。しかも高槻の遺跡ではわずかだが、この地に産するチャートを利用したものがある。その形がサヌカイト製のものと同機能を異にする石器であるところをみると、石器の用途に応じて石材の選択がおこなわれていたことがわかる。



写17 郡家今城遺跡西区の礫群

#### 石器の製作

郡家今城遺跡には多数の石器剥片や石屑が散乱していた。奈良時代の遺構検出にもなってあらわれたこれらの石片は、直径約四～六メートルの範囲に散乱し、しかもそうした場所が一二カ所もあった。それはあたかも石器製作の工房ともいえるものである。石器や石屑が散乱したなかに、石器製作に用いられたとみられる完好な二個の小礫がある。一つは径約五センチの石英質円礫で、その両端には叩ききずがついている。もう一つは径約二センチ、長さ約一〇センチの棒状の小礫であって、その両端にも叩ききずがついている。礫の形状・大きさからみて、前者はサヌカイト素材から剥片を大きく取り出すのに適当であり、後者は刃つぶしのような細部調整をおこなうのにふさわしい道具である。こうした石器をつくる道具が、多数の石器と共伴して検出さ



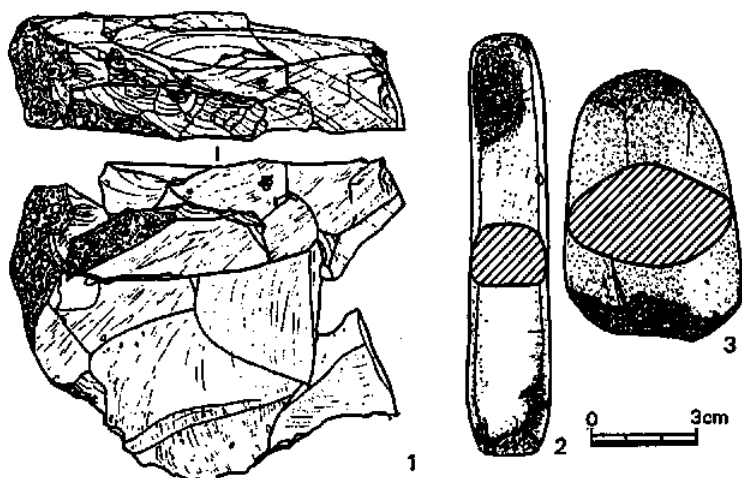


図52 接合された剥片(1)と石器をつくる道具(2・3)(1/2)

れたことは、郡家今城遺跡の重要性を一層高めてい  
る。もっとも石器製作の道具としては、このような礫  
石のほかに、骨や角・木などでつくった道具があった  
と推定されるが、それらは腐蝕したためのこらなかつ  
たのであろう。

郡家今城遺跡には数個の剥片を接合できるものがい  
くつかあり、石器製作の手順を推定できる。それによ  
ると、あらかじめ剥ぎとった適当な大きさの剥片の一  
端を調整して脊梁部をつくり、この脊梁部を叩くこと  
によって、まず断面三角形の横長の小片をとる。再度  
脊梁部を叩くと、あたかも鳥が翼をひろげたような形  
の横長剥片ができる。この翼状剥片についているさき  
の調整痕を細かく削って形を整え、反対側の鋭い縁辺  
はそのまま刃とし、また両翼端のうち一端は鋭利に、  
他端は鈍く仕上げ、一本のナイフ形石器ができる。  
翼状剥片が連続的にできるほど効率が良いことにな  
る。だが実際はそううまくゆかなかつたようで、同一

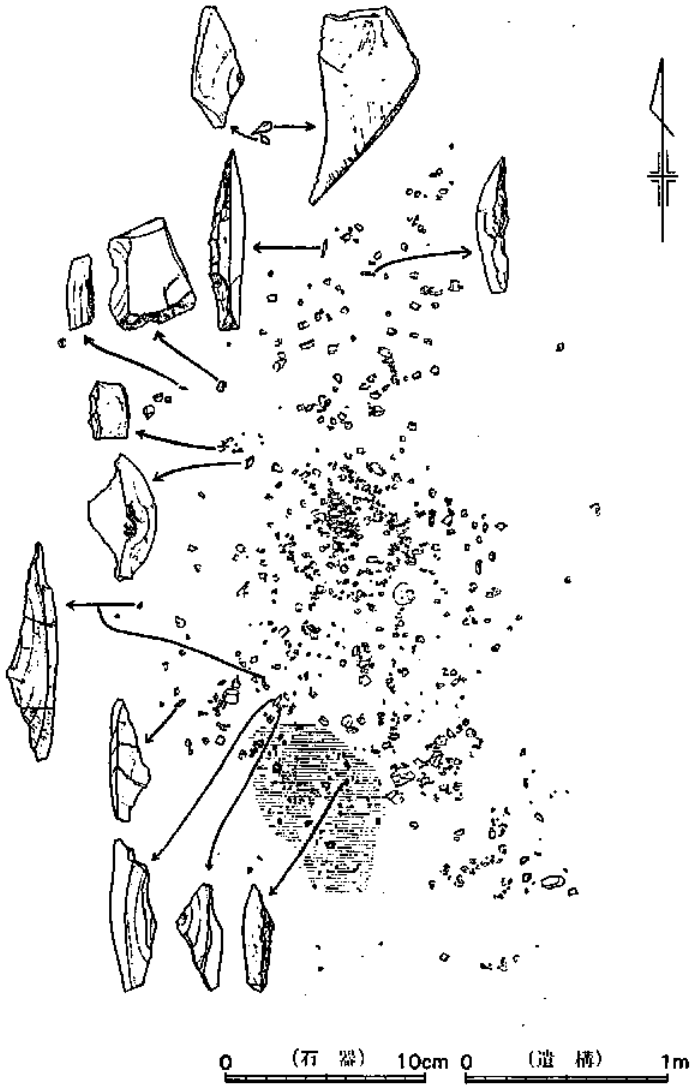


图53 那家今城遺跡西区の疎群

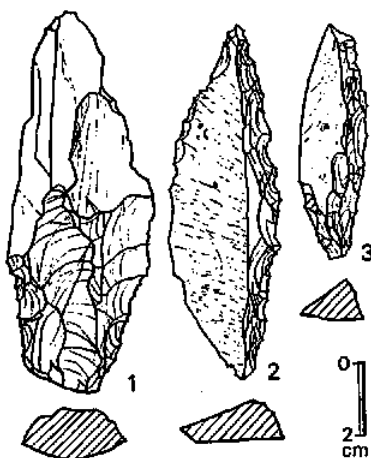


図54 津之江南遺跡の石器 (1チャート, 2・3サスカイト) (1/2)

一家今城遺跡では、散乱した石群の下から、一辺約二メートル、深さ約二〇センチの不整形の凹みがあった。片隅は深く、他は浅くなっていた。その中から、前述の楕円状円礫や撻器がみつかった。この凹みが人

の石核から六枚以上の剥片をとりながら、ナイフ形石器をつくれずに放棄したものもある。遠く四〇キロメートルも運ばれた石の素材を、むざと破砕してしまったとき、さぞがっかりしたことだろう。効率のよくない石器製作者たちに同情する一方、われわれはそのなから彼等の社会がどういうものであったかをくみとることができる。だから遺跡に散乱した石片は、小片といえども見逃がすことはできない。

集団の規模と 事実、郡家今城遺跡では、サスカイト石器片のほかに、おびただしい破砕跡が散乱して生活の領域 だ。それらの石は花崗岩やチャートなど雑多である。一見して、これらの石がそれ自体で

は利器に利用できないことは明らかである。割砕された石のかげらを丹念につなぎ合わせてみると、拳大のものからもつと大きなものまでいろいろあって、これらの塊石を一人の力だけで運んできたとは到底考えられない。本来この地点には石を包含した地層はないし、塊石はいずれも表面が磨耗しているから、芥川一帯の河原石か礫層の露頭面から運んできたとみるほかない。その労働はおそらく血縁的なつながりをもった複数の人間たちによっておこなわれたのであろう。郡

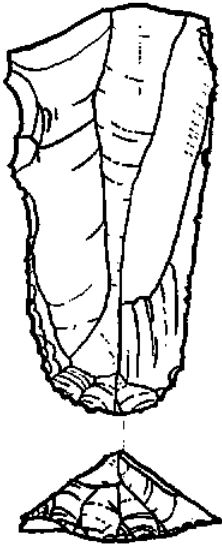


図55 郡家今城遺跡の  
搔器(硬質頁岩製)(1/1)

為的に掘られたものかどうか、先土器時代の住居など、構造物は稀れにしかわかっていないから判断できない。  
石器や石屑の散乱するブロックごとの整理が完結していない現段階では、この遺構群の性格を呈示できないけれど、これを詳しく分析するなら、単に石器製作場の機能だけでなく、この遺構をのこした人間集団の性格を明らかにすることができよう。

類似の遺構は津之江南遺跡にもあった。この遺跡の場合も、ナイフ形石器をつくっていたが、石器片や破砕物は少数で、ごく狭い範囲に限られており、規模が小さい。郡家今城遺跡のように、いくつものブロックが群集し、その群集地点より約二〇〇メートルをへだてて、またブロックがあるといった状態とは異なっている。津之江南遺跡は郡家今城遺跡の東南約八〇〇メートルのところにある。阿遺跡は北から南へのびる低い洪積台地の上に位置しているから、この台地のひろがっている地域が、当時の人びとのキャンプ地だったのかもしれない。そしてその外辺各所に単独で石器がみつかるのは、彼等の猟場だったのだろう。

文化の 郡家今城遺跡の凹みで検出し  
ひろがり た搔器は、このあたりでみか  
けない硬質頁岩製のものである。この石質は  
北陸や中部など東日本の石器によく利用され  
ているから、あるいはそうした遠隔の地とな  
らんらかの交渉があったのかもしれない。そう

だとすると、当時この地域は瀬戸内地域と密接な関係をもちながら、東日本とも交渉をもっていたことになる。最近では山形県庄内平野南部の遺跡から、この地域の石器とよく似たものがみつまっている。石器の組成をくわしく対比しなければ断断はできないけれども、当時の文化交流にはわれわれの想像以上に遠隔地との交渉があったのかもしれない。

さまざま 郡家今城遺跡の石器は大多数がナイフ

な 石 器 形石器で占められていて、石器の種類が少ない。だが塚原遺跡にはナイフ形石器のほか、掘

器・削器など多様である。最近、安山岩製の大形石器である握斧ツツブツが採集された。これは剥片を利用してつくられているが、ナイフ形石器に先行するものかもしれない。また、古曾部の伊勢寺裏山からは舟底様の石器が採集されている。これらの石器が時間的にどういう関係にあるのか明らかでないが、塚原遺跡の石器にはやや小形のもが目立ち、郡家今城遺跡よりやや新しく位置づける見解もある。また、古曾部の石器と似たものは、大阪南部の国府遺跡からも検出されているが、やや大ぶりである。

組合せ道具

先土器時代も終りに近くなると細石刃の段階をむかえる。適当な大きさの石に一撃を加えて打面をつくり、それを整えて石核とし、順次細かい石刃を剥ぎとる。細石刃一個では道具の

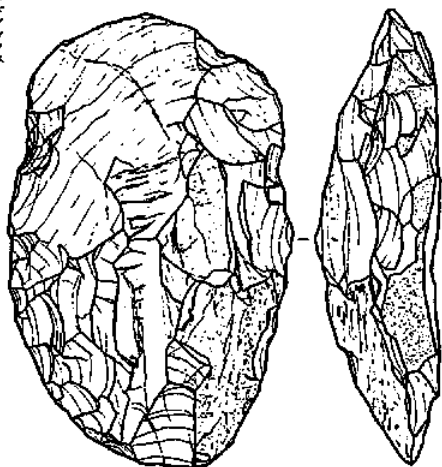


図56 塚原遺跡の握斧 (1/2)

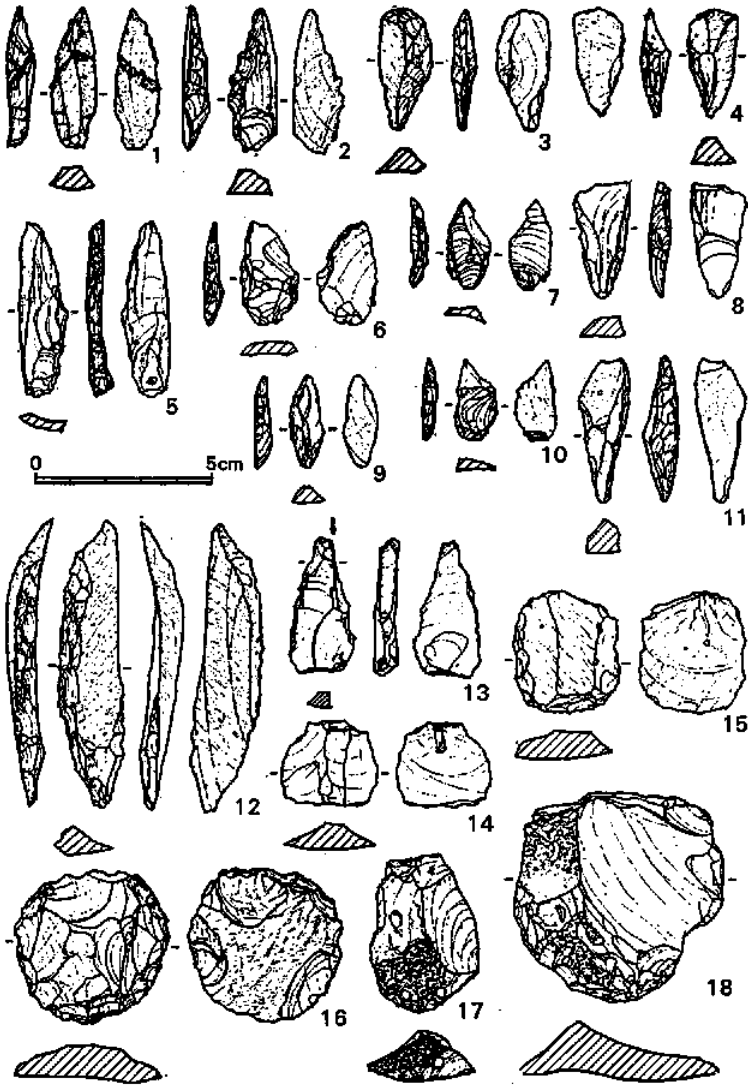


図57 塚原遺跡の石器

(1~12 ナイフ形石器, 13 形器, 14 紙刺ぎ剥片, 15~18 搦器) (1/2)

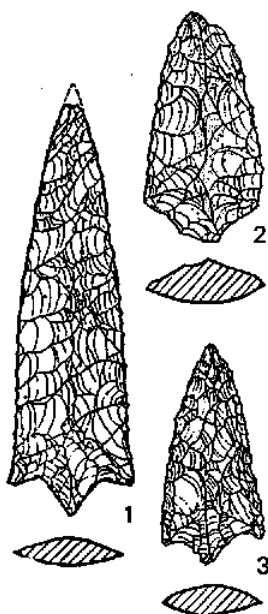


図58 有舌尖頭器 (1 箕面市奥, 2 氷室皇子塚, 3 塚原) (1/2)

機能をもたないけれど、木や骨などの台に溝を掘って、細石刃を並べ植えると長大な道具ができる。いわゆる組合せ道具である。従来、一個の石片で道具をつくったのに比べるとすんだ方法である。この文化はピュルム第四亜氷期になって、津軽海峡が陸化した段階に、北海道から氷の道を通じて本州に南下したものであるといわれている。その製作技法の上から、関東・中部以西の地域と、北陸・東北以北の地域と二つの文化圏が想定されているが、高槻では明確な資料はない。最近、南河内の白鳥遺跡の近傍で、チャートを利用した舟底形石核を再利用したスクレイパーが検出されている。

植かへ 新たに波及する「土器をもつ文化」の波が目前にせまっていたころ、細石刃文化は木葉形尖頭器や有舌尖頭器の文化にかわった。有舌尖頭器は基部に舌状の茎をつくり出して、そこから、そう呼ばれている。高槻では木葉形尖頭器はみつかっていないが、有舌尖頭器は南平台や氷室・慈願寺山のあたりから採集されている。

いずれも古墳の封土からの検出で、本来の所屬層を移動しているらしい。茨木の勝尾寺川をさかのぼった箕面市奥からみつかった有舌尖頭器は、長大で外ひろがりの返りがみられる。これにくらべて弁天山の例は細身であり、氷室皇子塚の例は身が短い。しかしいずれも木や骨

など軟質の道具を使って剥ぐ押圧剥離の技法でつくられている。土器のない時代から、土器のある時代へ移行しつつあったこの時代の狩猟具について、石器の大きさ・重さから、木葉形尖頭器の機能を突槍とし、有舌尖頭器を投槍とする考えがある。

ビュルム氷期から後氷期にかけて、気候はしだいに温暖化する。それとともに大阪湾にも海水が浸入しはじめ、かつてこの一帯に棲息していたナウマン象やオオツノジカなどの古い型の大型動物は、しだいに姿を消し、かわって落葉広葉樹林や常緑広葉樹林にすむイノシシやニホンジカが繁殖するようになった。投槍が大いにその機能を發揮したのは、そういう環境であったろう。しかし、やがてより一層強力な刺突力と飛翔力をもった面期的な狩猟具つまり弓矢が登場すると、投槍は急速に消滅した。それは単なる狩猟技術の変化にとどまらず、人びとの世界にも大きな変化をもたらしたのであった。まさに土器の文化の到来であった。そして押型文土器が普及するころには、猟犬による狩猟さえはじまった。

## 第二節 縄文時代

縄文時代の 縄文時代は早・前・中・後・晩期の五期に区分される。この五期区分を提唱した山内清男氏  
 時期区分 は、各期に一〇型式未満の土器型式を含むことを前提とする立場から、早期に包括される型式が一〇数型式におよんだことをもって、一九六四（昭和三九）年、従来の早期のうち、より古い諸型式を一括して、草創期とする縄文時代六期区分案を提唱した。しかし、この提唱はすべての研究者たちにうけいれ



られるにいたっていない。

現在わが国で最も古い土器は長崎県福井洞穴でみつかっている。ところがこの土器にともなう石器は、細石刃や細石核である。これに対し瀬戸内以東青森までの地域では、細石刃文化が消滅したあとにあらわれる有舌尖頭器にもなつて土器があらわれる。しかも九州以外の文化にみる石器と土器の組合せは、後の縄文文化と結びつくから、九州の細石刃文化に日本最古の土器があるからといって、これが縄文文化の源流にながるかどうか断言できない。むしろ文化の起源論と土器の起源論は必ずしも結びつかないとする見方もある。この見解を支持する場合、縄文章創期とせず、原土器時代という区分を設ける研究者もある。

このように、縄文時代の時期区分をどうするか、また縄文文化の源流をどう理解するかという問題は、今後にまつところが大きい。そこで以下の記述では、これまで一般にひろく用いられている五期区分に従つてのべようと思う。

縄文時代の 今から一万年ぐらい前、地質学上、沖積世といわれる新しい段階をむかえた。沖積世になつた自然環境でも、しばらく寒冷な気候がつづき、富士山をはじめとする火山が誕生した。この後になつて、やっと温暖な気候がおとずれる。

大阪湾周辺の地質学的知見によると、約九〇〇〇年も前の縄文時代早期初頭には、現在より二〇メートルも低いところに海面があり、河内平野には海水が浸入していなかったと推定されている。縄文時代早期から前期にかけて、北半球全体におこつた海進現象は、前期中葉には最大限に達した。関東地方では、現東京湾岸より四〇キロメートル以上も奥に海水が浸入し、その沿岸に貝塚が形成された。一方、これまで湖であつ

た瀬戸内湖は、この時期に完全に内海になった。大阪湾岸では、上町台地西縁や千里丘陵南縁に海蝕崖を生じ、偏西風の影響も加わって、上町台地から北方に砂洲が発達した。この砂洲はその後の縄文時代各期を通じて、さらに北方へ延びていく。

縄文時代前期末になると、海面の上昇運動は停滞する。そのころから中期にかけて、現在の守口市一带には、淀川の三角洲が発達した。やがて淀川の主流は三角洲の先端で二つに分流しはじめる。中期から後期には温暖期が終って海面は下降し、現在のそれに近づく。そして再び晩期から弥生時代前期にかけて、現在よりも温暖な気候をむかえた。上町台地から北へのびた砂洲はさらに発達し、大阪湾と河内湾の連絡口が狭くなったため、河内平野には淡水域のひろがる潟ができた。この段階に西方から稲作農耕が渡来したのである〔堀山彦太郎・市原実「大阪平野むすび」、かしまかし「国土と教育」一八〕。

長期にわたる縄文時代の気候変化は、陸上の植物や動物の棲息にも微妙な変化をあたえたことだろう。また地殻の変動やモンスーン地帯特有の降雨、それによってまきおこる大洪水や流路の変更、沼沢の出現・消滅等は人間の生活に大きな影響を与えたとはいえない。

#### 高槻の遺跡

縄文時代の高槻を語る資料はきわめて少ない。かつては塚原古墳群の墳丘からみつげ出された晩期の土器片数個と、少数の石器だけであった。最近、淀川の川底の浚渫によって、はからずも柱本地先の川底や、大塚・番田間の川底から、後の時代の遺物と



写18 柱本遺跡の調査

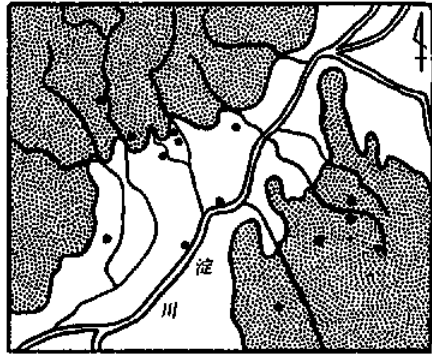


図59 高槻とその周辺の縄文時代の遺跡

しかし堆積砂層下九〇メートル付近に、厚さ約一メートルの黒灰色をした有機質粘土層があった。調査前、浚渫工事の際すくいあげた縄文式土器片には、いずれも黒灰色の有機質粘土がついていたから、強い土器のある層を求めるなら、この粘土層かもしれない。だとすると、縄文式土器のある層は現在の海水面より、約二メートルも低いところに位置していることになる。実際、沖積層上に位置する遺跡の場合、地盤沈下に伴って、海面以下に下降した遺跡の例もないことはない。それにしても、一般的にみられる縄文時代の遺跡の立地条件とは異なっている。

高槻ではこのほか、安満遺跡の東から後期の土器片、安満遺跡の北から晩期の土器片が、また宮田遺跡か

いっしょに縄文式土器が掘り出された。前者を柱本遺跡、後者を番田遺跡とよんでいる。しかし、両遺跡とも単に土器片だけを採集したにすぎず、他の一切の共伴遺物が明らかでないし、遺構も確認されていないから、遺跡と呼ぶのは正しくないかもしれない。ただ両遺跡の土器片は、ほとんど磨耗していないから、近くに遺跡があるのかもしれない。柱本遺跡では前と晩期の土器があつて、そのうち後・晩期の土器が比較的多くみられる。そこで、この遺跡について、縄文式土器のある層や遺構をたしかめるため、一九七二(昭和四七)年に三カ所を試掘した。地下七メートルまで掘り、部分的には一一メートルも掘ったけれども、遺構や遺物はみつからなかった。

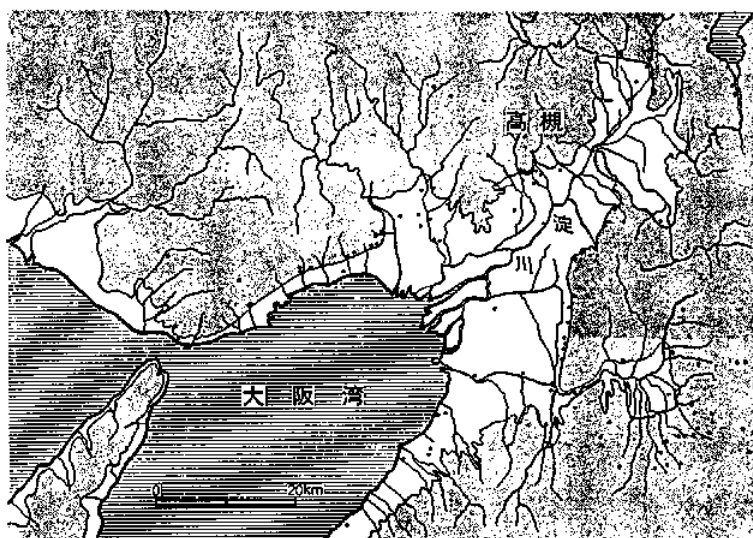


図60 大阪府を中心とした縄文時代の遺跡

らも晩期の土器片が検出されているが、いずれも遺構は認められないし、土器片はごく少数である。石器も芥川西方の郡家・岡本・土室・塚原、東では安満などで採集されているが、いずれも散漫であって、まとまった出土状況を示さない。

高槻の周辺 日本全体からみて、近畿地方は縄文

時代の遺跡の発見例が少ない地方である。なかでも大阪府は少ない。現在知られている遺跡数は二〇カ所前後である。時期的にみると、一応縄文時代各期に遺跡がみられるとはいえ、主として後・晩期の遺跡がやや多い程度で、その分布も生駒山西麓が目立つにすぎない。さきへのべた淀川底の柱本遺跡のように、前期から晩期までの土器を包含する状況は、遺跡数の少ない事情をある面で語っているのかもしれないけれども、遺跡の絶対数が少ないということは今後も変らないであろう。その理由として、縄文時代人の食糧獲得の対象となる資源

が少なかつたことをあげる研究者もある。

高槻をはじめ三島地方には、早期の遺跡はみつかつていない。しかし、もっと範囲をひろげると、枚方市交野山の西麓に神宮寺遺跡があり、その東の山間部に穂谷遺跡がある。また京都盆地の縁辺にもいつくか早期の遺跡が知られている。いずれも遺跡の規模は小さい。おそらく一〇人前後の小さな集団が、獲物を求めて移動していたのであろう。神宮寺遺跡では円磔をつんだ野外の炉跡がみつかつているが、当時は住居と火を焚くところは分離していた。琵琶湖に近い瀬田川畔の石山貝塚は、早期の淡水産貝塚として著名であるが、そこでも磔を中凹みに築いた炉跡や焼貝面があった。この貝塚からは、土器のほか磨製石斧・打製の石鏃や石錐、網につける石錘、シカの角でつくった斧・手斧、骨角製のさまざまな装身具などがみつかつている。装身具の中には鹹水産かんすいの貝でつくった腕輪もある。また淡水のセタンジミからなる貝塚の中に、鹹水性の魚類の骨片等があつて、当時琵琶湖沿岸の人々が海浜地帯との交渉をもっていたことが知られる。石山貝塚を例にとつてみると、早期の段階はすでに石製や骨角製の生産用具が高度に分化・発達している。なかでも石鏃は弓矢の使用されたことを示すもので、食糧獲得の技術に大きな進歩のあつたことを物語っている。また土器の製作は「人類がはじめて利用した化学的変化」であるが、それは煮炊きの道具として、食事の内容を豊かにしただろう。さまざまな装身具は彼等の精神生活の複雑さをよく示してくれる。〔平安字圖考より古字ク。ラフ編「石山貝塚」〕

茨木市の東奈良遺跡から、最近前期の土器片が一片みつげ出された。それは爪形文や縄文のついた土器片で、京都の北白川遺跡の下層からみつかった土器と同じ文様である。北白川下層式の土器は今ではもっとこまかく区分されるようになっていゝる。それと同じ文様をもつた土器は、福井県三方郡の鳥浜貝塚にもあつ

て、最近おこなわれた調査で、石斧を装着するための精巧な木柄がいくつもみつかった。また丸木舟や櫂もある。多数の石鏃といっしょに桜の皮をまいた丸木弓もある。さらに黒漆塗りの盆や、赤漆塗りの縦櫛、編み物の破片などもある。この貝塚からみつかった堅果植物には、クルミ・シイ・ヒシなど、そのまま生で食べるのできるものが多いという。一般に西日本の縄文時代の植物食が、照葉樹林帯のアクの少ないドングリ類を利用してゐる様子がここでもみられる。それと前期の段階に、すでに高度な木工技術をもち、後の弥生時代の木工技術の先駆的な形態がこの段階に形成されてゐることにおどろく。

柱本遺跡からみつかった縄文式土器片のなかに、神戸市須磨区にある大歳山遺跡の土器とよく似た破片がある。大歳山式土器は、前期末の土器であるが、細い凸帯に爪形の刻みをつけ、その底部は小さい多角形の平底をした深鉢形（よぼせ）の土器である。この遺跡は標高三〇メートル、東西約二八〇メートル、南北約一五〇メートルの東から西へのびた半島状の台地にある。前期はなおこのような台地上に集落を営むのが一般的であった。また箕面市の瀬川遺跡も同様の立地条件にある。その点で東奈良遺跡や柱本遺跡は特異である。この段階は瀬戸内地方との結びつきが強いとともに、東日本風の土器もみられる。そして前期にくらべて一層人口も増加したと推定されている。大阪南部の藤井寺市国府遺跡は府下屈指の縄文遺跡であるが、ここでは仰臥し、下肢を屈し、上肢をまげて埋められた、いわゆる屈葬の人骨がみつかつてゐる。こうした葬法は前代とかわるところがない。

柱本遺跡からは、中期の船元式土器もみつかつてゐる。それは瀬戸内地方との密接な関係にあったことを示している。一方、伊丹市の大阪空港内から、関東地方の勝坂式土器がみつかつてゐるから、この一帯は東

I 考古学からみた原始・古代の高槻

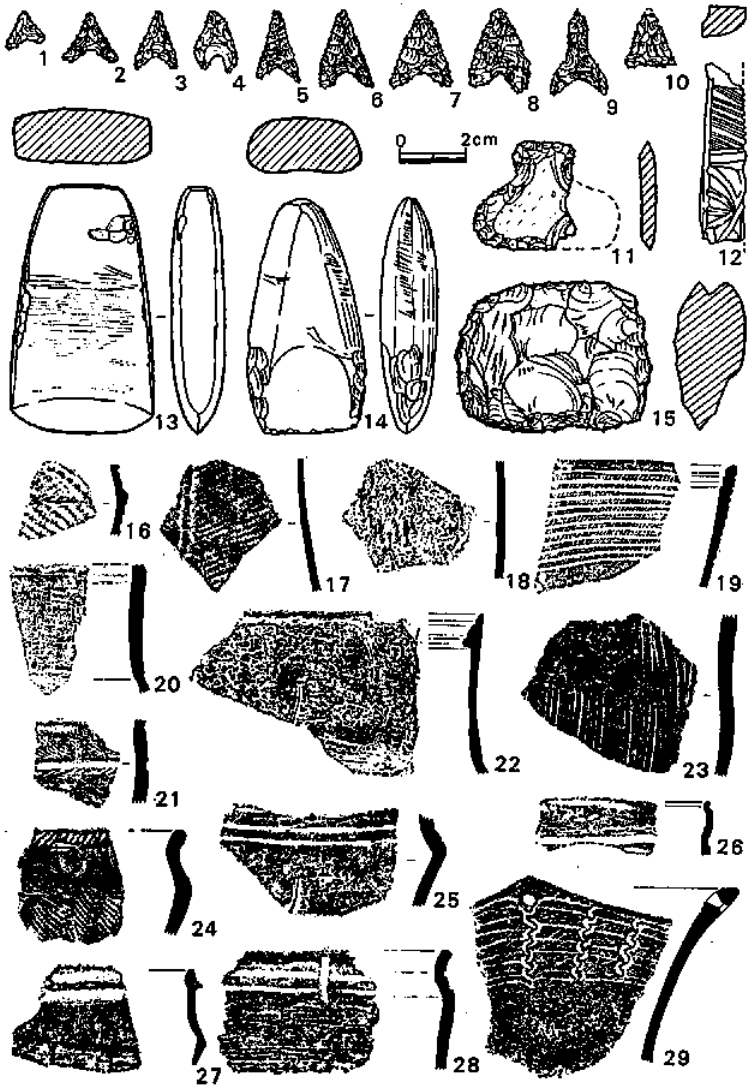


図61 縄文式土器と石器 (1~10 石鏃, 11 石匙, 12 石棒,  
13・14 石斧, 15 石器, 16~29 土器)

西の影響をうけていたことがわかる〔佐原真ほか「伊丹の遺跡」と遺物「伊丹市史」4〕。関東地方、わけても東京湾沿岸では、中期から後期にかけて、台地の尖端に、馬蹄形や環状の貝塚を形成しつつあった段階である。中部山地でも同様な傾向にあった。八ヶ岳山麓の与助尾根遺跡の集落について指摘されているところによると、二つの堅穴住居を一組とする三組六棟の堅穴が一群をなし、同様の単位がさらに一群をなし、ともに台地上の南辺に併列しているという。この二群にはそれぞれ土偶や石柱・石棒があつて、あたかも二つの血縁集団からなる村のようにみられる。一つの堅穴に四、五人とすれば、一二棟では五〇〜六〇人になる。一単位をその半数としても、三〇人前後である。その人口は前代よりも増加し、しかも複雑な構成をとりはじめている。東奈良遺跡でも、所属時期は明確でないが、石棒が一個みつかった。おそらく当時この三島でもさきの与助尾根の村と似た村があつたのだろう。枚方市星田遺跡では、中期特有のキャリパー形の深鉢形土器が検出され、東大阪市の善根寺遺跡からも中期の土器がみつかつている。この時期における淀川の三角洲の発達はいちじるしく、上町台地北方の砂洲もさらに延長したとすれば、当時の縄文時代人の活動に大きな変化をもたらしたのである。柱本遺跡でみつかった土器片が、主に後・晩期に多いのも、中期後半の急激な環境の変化とそれに対応する人間社会の危機を示しているのかもしれない。

柱本の後期の土器には、関東の加曾利BⅠ式の土器がある。それは中期以来、この地域が持続してきた日本との交渉の名残りであつた。やがて、ふたたび瀬戸内地方の影響がつよまり、それは晩期まで続くことになる。柱本遺跡に、瀬戸内地方の津雲A式や彦崎KⅠ・KⅡに類する土器片がみられるのはそうした傾向を示すものである。これらの土器は、いずれもその器面に縄文をつけ、局部的に磨き消す技法をもつて飾ら





図62 縄文人のムラ(想像図)

れる土器である。しかし、元住吉山Ⅱ式以降になると、縄文によって飾る手法は姿を消す。そして、後期末の宮瀧式では、凹線をめぐらし、文様を簡略化する傾向をとりはじめた。この時期の土器は、箕面市瀬川、伊丹市の大阪空港、東大阪市の猪木・日下大池、大阪府森之宮などでみつかっている。最後の森之宮遺跡は、最近明らかになった貝塚で、上町台地の東縁に位置するこの貝塚は、ハマグリ・マガキを主とする貝層に、クロダイ・マダイ・スズキ・フグ・ハモなどの魚骨が遺棄され、当時の人々が大阪湾の海の幸に依存していたことを示している。

これまで煮炊きの道具として主流をなした深鉢形の器形は、後期になるとさまざまな形に分化した。それらはやがて定形化し、各バリエーションは保持されるようになる。こうしたあり方に、縄文社会の停滞性を指摘するとともに、そうした社会を律するタブーがあったといわれている。犬歯や門歯などを抜く抜歯の風習がはじまるのもこの時期であり、それが成人への通過儀礼とすれば、当時の共同体規制の一端を示していることになる。また埋葬された死者

の中に、ことさら多数の貝輪や耳飾などをつけた人物のあることをみると、呪術者的な役割をもった人物が誕生していたと考えられる。

晩期になると、柱本遺跡のほか、安満遺跡の北方や宮田・塚原などの遺跡からも土器片が採集されるようになる。安満の例で見ると、土器の層は、深い沼地に面した平地である。宮田の例もまた平地であって、これまで一般に縄文式土器のみつかる高台とは異なっている。そこで、こうした立地をとることに着目して、農業生産への動きとみる意見もあるほどである。しかし、塚原のような海拔五〇メートルの丘の上にも遺跡があることをみると、農耕適地への移行と単純に結びつけにくい。

柱本からみつかった晩期の土器の中に、滋賀里式とよばれる土器片がある。その標式的な遺跡は、大津市滋賀里にあるが、近年、この遺跡の調査が行われ、総数一〇〇基以上の墓やさまざまな遺物がみつかった。

墓は約一メートル×〇・六メートルの長方形の土壇墓と甕棺墓とである。甕棺墓には小児をおさめたとみられるが、個々の墓には、副葬品もなく、差が認められない。また、赤や黒に塗りわけた木弓や木腕などさまざまな木製品のほか、骨角器や石器・土器などがあつたが、高度に発達したそれらの技術は、専門工人を独立させるほどの質的水準を示すものではない。しかし、大阪南部の大和川底からみつかつた船橋式を標式とする段階には、稲作農耕の滔々たる流れは、すぐそこに迫つていたのである。